

## 富士見市民大学 公開講演会

— 中国古典に学ぶ人生100年を生きる知恵 —

### 思想・思考と言語

講 師：林 克 氏（大東文化大学名誉教授）

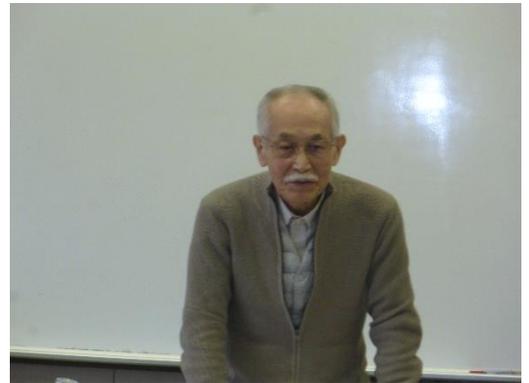
開催日時：令和2年1月18日 13:30～15:00

開催場所：鶴瀬公民館 第三集会室

粉雪降る寒い日になりましたが、会場は熱心な聴講者で満席となりました。本講演会は、昨年10月に予定されていましたが台風19号の影響で延期となり、本日の開催となりました。

本講演は、中国の思想体系から学ぶこととして、「思想（ものの考え方）・思考（冷静に論理をたどって考えること）と言語（言葉）」をテーマとして、禅問答、インド仏教、中国禅宗、「莊子」知北遊、老子と莊子から構成されていました。

講演の要旨は次の通りです。



講師 林 克氏

#### 1. 禅問答

禅宗の僧が悟りを開くために行なう問答。悟りは言葉を越えた真実を全身全霊で捉えること。言葉を越えたものを言葉で問答するからわかりにくい。

難解な問答、奇妙な問答の意味となる。

雲門和尚はある僧から「仏とはどういうものですか？」と尋ねられ、「乾屎橛（かんしけつ = 糞かきベラ）だ」と答えた。

#### 2. インド仏教

前6～前7世紀頃、自由で清新な思想家たちが相次いで登場したが、その一人が仏教の元祖「ゴータマ・シッダールダ」（後の釈迦）。青年期を過ぎた釈迦は、人生の根源に潜む苦の本質の追求とその解放である解脱を目指し、苦行の末、ヨーガの伝統を受け継ぐ座法・調息・精神集中によって修行を重ね、心身統一の境地、大いなる悟りに至った。ブッダ（覚者）と呼ばれる。

ヨーガの修行法は、禅定として仏教に取り入れられる。

### 3. 中国禅宗

600年代にブッダから28代の祖師達磨がインドから渡来し、中国禅宗の祖となる。その中国禅宗の本質を表すと言われるのが次の言葉。

- ・ 教外別伝（きょうげべつでん＝経典によらず、仏教の核心は直接伝える）
- ・ 不立文字（ふりゅうもんじ＝悟りは文字や言葉で伝えれない。本質を直視）
- ・ 直指人心（じきしにんしん＝真理は座禅により自己の心の中で発見できる）
- ・ 見性成仏（けんしょうじょうぶつ＝真理である自己の本姓で仏になれる）

### 4. 「莊子（そうじ）」知北遊

「莊子」は、前350～200年頃に書かれた著作を集めた書。「道」は全存在の根源であり、世界そのものでもあり、仏教の仏に相当する。

#### 知北遊の話に見られる思想

- ⇒ 「道」の観点から全存在が同一の存在性を持つ
- ⇒ あらゆるものが道を持つから、道に焦点を当てれば万物は一体
- ⇒ 万物一体観（中国的世界観）

### 5. 老子と莊子（そうし）

#### 1) 老子

「老子」と「論語」（孔子の言行録）の内容を対比すると、「老子」が儒教（孔子の教え）に対するアンチテーゼから成り立っていると見える。

批判されているのは、孔子が唱えた固定化し形式化した「道」（人が守るべき原理・原則）である。この観点から見れば、孔子が老子に先行し、同様のことが「老子」全篇にも言える。



## 2) 儒家と道家

儒家（孔子や孟子など儒教を信奉する思想家）と道家（老子・荘子など道や無を信奉する思想家）を始め、主張の異なる思想家が輩出されたのは、周初の封建制度が崩壊して群雄割拠の状態となり、列国の生存競争が激化したことによる。諸子百家と呼ばれる思想家たちも次第に二分され、儒家（職能を持つ思想家）と道家（超越的・批判的立場）に連なった。

## 3) 道家の思想

老子の基本思想は、「無為自然」である。「道は常に為す無く、而も為さざる無し」に対する確信からである。無為自然に反する人為には、知識・学問・技術・道徳・法律など文明や文化と呼ばれるものすべてを含む。

老子は、万物の根本となる真理を「道」と名づけるが、その「道」を「一」とも呼ぶことがある。「一を抱く」、「天は一を得て清く、知は一を得て寧く、神は一を得て生ず」などである。「一」というのは、分割を許さないもの、分析したのではその姿が破壊されるという意味が含まれている。それは相対差別を本質とする知識によっては理解できないものである。

知識で理解できない真理は、体験的直観により捉えられる。老子は、そのような直感を「明」と呼ぶ。「明に復るを常といい、常を知るを明という」。

人為的な相対差別の知識に拠らず、自然の光によって照らし出された姿がそのものの真の姿であるとする。

荘子も「道」を用い、「無為自然」を根本の立場とすることでは同じである。しかし、何を「道」とし、何を「無為自然」とするかについては、両者間に微妙な差がある。

荘子が最初に取り上げるのは、ありのままの真理はいかにして得られるか、という認識論の問題。その真理を知ることが、人間の救いに繋がっているから追求するのである。

ありのままの真理の求め方を問題にするのは、人間の言葉が持つ不完全性、常識的思考法の欠陥が原因だからである。

分析・分断的認識は、人間以外の、もしくは人間以上の立場に立てば、一挙に解決するだろう。そこでは、対立がないから一つであり、差別がないから齊しくて同じである。これが荘子の「万物斉同」の説である。老子の「有は無より生ず」の「無」は「有」を包み込んだ絶対無であり、正しくは「無限」を意味するものであった。

以上

### 聴講して

後半の「道家の思想」として、老子と荘子の基本思想を拝聴できた中で、そのありのままの真理は、知識・学問・技術などに拠らない「体験的直観」によるという認識論に興味を持てた。それは、いわゆる左脳（論理）というより、右脳（ひらめき）をより一層磨けと言っているのだろうか？ただ、これに対する「儒家の思想」（孔子や孟子）からの反論も拝聴しなかった。

特に人気のある「論語」は、今も生きている教えでもあるので、人生100年のテーマに合うのではとの思いがあるが、聴講生の皆さんはどう感じられたでしょうか。

(報告；佐藤鋭夫)

